

宇佐美まゆみ (1999) 「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」『国文学』44(6)、
学燈社: 83-89.

交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動

1 はじめに

あいさつ行動というものが、対人コミュニケーションにおいて非常に重要な役割を果たしていることは、誰しも認めることであろう。人と人との会話は、単に情報を伝達するためだけに行われるのではなく、会話をすることによって互いの関係を確認しあうというように、言葉をかかわすこと自体が目的になっている場合が、私たちの日常生活の中には意外と多い。お出かけの様子 of 明らかな近所の人に「お出かけですか？」と声をかけるということなどはその典型例で、そこには情報伝達・交換の意図はなく、従って声をかけられたほうも「ええ、ちょっとそこまで…」と答えればよいわけである。この一見意味のない「ことばのやりとり」が、実は、円滑な人間関係を維持するために非常に重要な役割を果たしているのである。そういう意味で、「あいさつ行動」は、人間関係調節の方策としてのポライトネス (Brown and Levinson、1987)、ディスコース・ポライトネス (宇佐美、1997a ; 1998a) とともに密接に関係している。

このような、情報伝達機能のほとんどないことばのやりとりである「あいさつ行動」は、これまで「交感的コミュニケーション (phatic communication)」の代表的なものとして、文化人類学、社会学、社会心理学、社会言語学などの領域で注目を浴び、様々な観点から研究がなされてきた。現在では、そのひとつのアプローチとして、交感的コミュニケーションを、会話の流れとしてのディスコースにおいて、話者間の交渉によって作りあげられていく、動的な「相互作用」として捉えようとする動きが出てきている。つまり、「言語社会心理学」的観点からは、「あいさつ行動」というものを、単なる話者の表現選択の問題としてではなく、相手の反応も含めたディスコース・レベルにおいて、その「相互作用」を動的に見ることが重要になってくる。

本稿では、あいさつ行動を、出会いや別れの際に交わす単なることばや表現 (決まり文句) の使用行動としてだけでなく、広く「人間の相互作用」という「ディスコース」における機能面から捉える見方を提示したい。

2 意味論的に見た交感的コミュニケーション研究の流れ

「交感的コミュニケーション (phatic communication)」という言葉が最初に用いたのは、英国の人類学者マリノフスキー (Malinowski, 1923) である。この中でマリノフスキーは、「交感的コミュニケーション」を「自由で、目的のない社会的交際で使用される言葉」として記述し、「沈黙の脅威を取り除く機能を持ち、仲間意識の必要性によって結び付けられた人々の人間関係の絆を確立する役割を果たす」としながらも、「考えを伝達する目的には役割を果たさない」と位置付けている。つまり、「交感的コミュニケーションは、目的がなく、つまらない、そして時には疑わしく、無関係でさえある会話であるが、しかし、社会的結集と相互認識を求めるといふ人間の本質的な欲求を満たすプロセスの一部である」というのが、マリノフスキーの捉え方であった。

宇佐美まゆみ (1999) 「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」『国文学』44(6)、学燈社: 83-89.

その後、Jakobson(1960)が、言語記号による伝達行為が成立するための六つの要素に対応する、言語の六つの基本的機能の一つとして、この交感的 (phatic) 機能をあげている。しかし、その後の研究では、この「交感的コミュニケーション」は、談話 (おしゃべり) というものを「指示機能が不完全で、伝達機能がほとんどない」とみなす観点から分析され、どちらかというとな否定的な評価を受けてきた感がある。交感的コミュニケーションの、議論に発展しえない性質を強調して、それを「退屈で平凡なもの」とみなしたもの (Leech, 1974) や、意味論的に「空虚(empty)」であるとしたもの (Turner, 1973)、また、「いつかお昼を一緒に食べましょうね」というような、アメリカ社会では、別れ際に社交辞令的に使われる一種の「あいさつ」となっている「誘い」を取り上げ、多くの外国人留学生はこれを真に受け、その後一向に誘いが来ないことを、不誠実だとして、不満を漏らしているということなどを例に、暗に「あいさつとしての誘い」の再考を促す研究(Wolfson, 1981)などが、その例としてあげられよう。

最後の例は、日本語の「いつか、家に遊びに来てくださいね」という社交辞令や、転居通知にある「お近くにお越しの際は、是非お立ち寄りください」というフレーズに通じるものである。こちらのほうも、在日の外国人には概して不評で、「家に遊びに来てくださいねと言われたから、実際に遊びに行ったら、露骨にいやな顔をされた」というようなエピソードに、事欠かない。異文化間コミュニケーションにおける誤解の例として、よく引き合いに出されるものである。どうして日本人はそのような言語行動をするのかということの説明できないなら、「日本人は不誠実だ」という烙印を押されたままになってしまうだろう。それを説明するのが、以下に述べる交感的コミュニケーションの目的と人間関係に果たす機能である。

交感的コミュニケーションに関する以上のような否定的な見方は、その「言語自体の意味」に重きを置く見方から生まれてきた捉え方である。しかし、「言語使用が果たす機能」という観点から、これら広義の「あいさつ行動」を見てみると、それが先の社交辞令としての「誘い」のように、たとえ言葉自体の意味からすると嘘になってしまうような言葉も、「あなたとの交友関係を今後も維持したいんですよ」という含意を持つフレーズとして慣用化したものだと考えれば、それを「あいさつ」代わりに使うことが、人間関係を円滑に維持するための重要な方策の一つとなっていることは、容易に理解できよう。ただし、そういう言葉の用法を理解するには、ある言語の使用法に関する共通の言語・文化的認識が必要となる。話し手と聞き手の双方に共通認識がないと、先に述べたような異文化間コミュニケーション・ギャップが生じることになるのである。

3 ディスコースにおける機能という観点から見た交感的コミュニケーション研究

マリノフスキー後、どちらかというとな否定的な観点から扱われてきた交感的コミュニケーション研究の流れの中で、その分析の観点を、「会話という相互作用の開始部と終結部における連鎖的な (sequential) 構成の中において、人間関係を示しているところに価値がある」という、より肯定的な捉え方へと引き戻したのが、Laver(1975, 1981)である。Laver

宇佐美まゆみ (1999) 「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」『国文学』44(6)、
学燈社: 83-89.

の主張の最も重要な点は、交感的コミュニケーションを「ディスコースにおける機能」の観点から捉えたところである。Laver は、交感的コミュニケーションは、会話の開始部においては、まず、第一に、沈黙が敵意と解釈されるのを和らげる (propitiatory) 機能があり、第二に、この段階におけるやりとりには、今後の関係確立に備えての探索的 (exploratory) 機能もあるとした。そして、第三には、相互作用を始めるといふ開始 (initiatory) 機能があるとした。また、会話終結部における交感的コミュニケーションは、会話の終結がある種の関係維持の「拒絶」にならないように和らげ、互いの関係を強化する機能を持つとしている。さらに、Laver は、交感的コミュニケーション開始の際の言語形式は、その後の相互作用の話題展開を規定するとともに、社会的地位などの重要な社会的情報を付与するとともに述べている。前者は、連続したやりとりとしてのディスコースに意味があるという見方を示しており、また、後者は、一見意味のないように見える「あいさつことば」は、当事者同士の関係を維持するためのみならず、第三者に当時者の関係を示す働きも持っていることを指摘している。例えば、日本語で、次のようなあいさつ行動があったとする。

A: おはよう。

B: おはようございます。

これだけで、少なくとも、A は B の目上にあたるということがわかるというわけである。

4 交感的コミュニケーションにおける「交渉」という観点

マリノフスキーに触発された交感的コミュニケーションに対する「おしゃべり (small talk)」と言う観点からの見方も、また、Laver の機能論的、代理社会的 (prosocial) 観点からの捉え方も、主に「定型的なあいさつ (formulaic greetings)」の分析を中心としていた。それにもかかわらず、両者とも「あいさつ行動」というものが文化によって異なるものであるという「比較文化的視点」には触れておらず、交感的コミュニケーションを一つの「談話のモード」として捉えていた感がある。

しかし、Coupland, Coupland, and Robinson (1992) は、交感的コミュニケーションが持つ「人間関係の調節」という「目的」をより重視し、交感的コミュニケーションは、単なる「談話のタイプ」としては捉えられないものであるとした。そして、およそ「人間関係調節」という目的が重要になった相互作用においては、出会いや別れのあいさつや世間話などの談話タイプにおいてだけでなく、事務的な会話や課題を達成するための会話などにおいてさえ、「交感的モード」というものが、現れてくるはずであると指摘している。また、そう考えると、場面によっては、会話参加者の一方は、「交感的モード」でいきたい、つまり、好い関係や親しい関係を築きたいと思っているにもかかわらず、もう一方は、そう思っていない場合も考えられる。そこに、「人間関係」が「交渉 (negotiate)」されるプロセスとして、「交感的コミュニケーション」を捉える見方が生まれてくる。

5 社会人の初対面二者間会話における「あいさつ行動」の中の「交渉」

宇佐美まゆみ (1999) 「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」『国文学』44(6)、
学燈社: 83-89.

以下の例は、ベースの被験者(35歳前後の女性)12名に、初対面の年上(45歳前後)、同等(35歳前後)、年下(25歳前後)にあたる同性、異性をそれぞれ組み合わせ、約15分間会話をしてもらって得られた72の社会人の会話データ(宇佐美、1998b)の「開始部」冒頭からのものである。被験者は、互いに相手の名前や年齢などを事前には一切知らされていない。これらの初対面二者間会話の典型的な始まりは例1のようなものである。

注記 文字化は、「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」
(宇佐美、1997b)による。

BF: Base Female OF: Older Female YM: Younger Male

< > {<} はオーバーラップされた発話

< > {>} はオーバーラップした発話

<笑い>は、<>に入れて記す

例1

- | | | |
|---|------|------------------------|
| 1 | OF01 | はじめまして。 |
| 2 | BF01 | はじめまして。 |
| 3 | BF01 | あっ、BF01 と申し<ます。> {<} |
| 4 | OF01 | <あっ> {>} あの、OF01 です。 |
| 5 | BF01 | よろしく<お願いします。> {<} <笑い> |
| 6 | OF01 | <よろしくお願いします。> {>} <笑い> |

初対面の際の、定型的な「あいさつ」が双方から行われ、「よろしくお願いします」の部分は、ほとんど同時に発話され、お互いに「笑い」によって緊張を解くようにしているというのが典型的なものである。

宇佐美 (1998b) のデータでは、72 会話中 27 会話 (37.5%) で、このような典型的なあいさつが交わされていた。「はじめまして」の代わりに「こんにちは」を用いているもの(6 会話、8.3%) や、名前が導入された後、「どういう字をお書きになりますか」などと、名前の漢字や由来に話が展開した場合などに、「よろしくお願いします」が省略されたもの(24 会話、33.3%) などを合わせると、約8割(79.1%) が、定型的なあいさつで会話を始めていることになる。残りの2割も、遅れてきたことを詫言ったものなど、個々の状況に応じた発話が増えられているものがほとんどである。お互いに型どおりのあいさつを儀式的に行うことによって、同じ社会の成員であることを認め合い、確認しあっているのである。その「儀式」を終えてから、実質的な相互作用としての会話が始まるのである。

しかし、例外的ではあるが、話者の一方が少々型破りな場合には、先に述べた「交感的コミュニケーション・ディスコース」における「交渉」が生じることになる。次の例2を参照されたい。

例2

宇佐美まゆみ (1999) 「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」『国文学』44(6)、
学燈社: 83-89.

- 1 YM02 参ったな……。[ひとりごと]
- 2 BF03 /沈黙3秒/こうやって向き合うとお見合いみたいですよね。<笑い>
- 3 BF03 すいません、あのう、あたしはN学科のBF03と申します。
- 4 YM02 あ、コンピューター室のYM02です。
- 5 BF03 YM02さんですか、はじめまして。
- 6 YM02 どうも、こんにちはっ。[照れている感じ]
- 7 BF03 はじめてですよ。[同じ職場に勤めているが、会うのは初めてだと言う意味]
- 8 YM02 ええ。[はっきりした言い方]
- 9 BF03 あたしはコンピューター室には全然ご縁がないもんですから。
- 10 YM02 んーそうですか。[無声化発音]

YM02は、まだ少々学生気分が残っている感のある20代男性であるが、研究のために引き合わされた初対面の女性と向き合って、まさに「参って」いるようである。それにしても、独り言とはいえ、1行目の発話は、社会人の初対面の会話における「第一声」（これこそが、普通「あいさつ」として捉えられる発話である）としては、適切だとは言えないだろう。しかし、YM02は、定型的なあいさつの代わりとなるこの発話によって、少しでも「くだけた雰囲気」で話を進められないかと、「交渉」しているとも考えられる。対話相手のBF03が、その「交渉」にどう対応しようか、YM02とどういう「モード」で話すべきなのかを無意識にせよ考えていることは、2行目の3秒間の沈黙がよく物語っている。馴れ馴れしいと少々不快に感じていたかもしれない。そして、その沈黙の後、BF03は、「こうやって向き合うとお見合いみたいですよね」と軽くジョークを言うことによって、相手の「交渉」に一度は応えて、相手のフェイス (Brown and Levinson, 1987) を保った上で、次に、初対面の少々改まった「型どおり」のあいさつモードに戻して、自分を名乗るのである(3行目)。

しかし、自分を名乗る前に、「すいません」とつけているところが興味深い点である。この「すいません」は、2行目を受けて、「初対面の会話の最初から冗談などを言ってすみません」という照れを表しているともとれるが、もともと、それはYM02のくだけた雰囲気に応えるために出てきた冗談である。故に、この「すいません」は、「(あなたの交渉に答えられなくて) すいませんが、くだけた雰囲気はこのくらいにして、一応、少々改まって、型どおりの自己紹介をさせてもらいますよ」という、本来の「詫び」の意味も残った「モード切り替え」のマーカースとして機能していると考えられる。そして、その後は、それを受けてYM02も普通に名乗り、ごく一般的な会話の展開に戻っている。YM02の「働きかけ」は失敗し、結局、この冒頭の「交渉」の結果、この会話のその後の展開は、その社会における典型的(規範的)な「社会人の初対面の会話」の例外ではなくなったのである。

6 おわりに

宇佐美まゆみ (1999) 「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」『国文学』44(6)、
学燈社: 83-89.

社会人の初対面二者間会話データに基づく以上のような考察は、会話の冒頭におけるYM02の「参ったな…」という独り言から始まる「ディスコース」を、相互作用や交渉という動的な視点で捉えて始めて可能になるもので、「参ったな…」という一発話の「意味」の分析からだけでは、明らかにできないものである。そこに交感的コミュニケーションとしての「あいさつ行動」をディスコース・レベルで捉える意義がある。紙幅の都合上、今回は、あいさつ行動をディスコース・ポライトネスという観点から論じる余地がなくなってしまった。それは、また別の機会に譲りたい。

引用文献

<日本語>

- 宇佐美まゆみ(1997a) 「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」
『女性のことば・職場編』、現代日本語研究会編、ひつじ書房。 241-268.
----- (1997b) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for
Japanese:BTSJ) の開発について」『日本人の談話行動のスク립ト・ストラテジーの
研究とマルチメディア教材の試作』文部省科学研究費一般研究 (C) 研究成果報告
書。 (URL : <http://nihongo.human.metro-u.ac.jp/mic-J/nihongo/mic-j-kaiwa.html>)
----- (1998a) 「ポライトネス理論の展開 : ディスコース・ポライトネスという捉
え方」『日本研究教育年報 (1997年度版)』東京外国語大学日本課程編、145-159.
----- (1998b) 『初対面二者間 72 会話資料 (年齢・性別統制) : エクセル版』、私家
版。

<英語>

- Brown, P and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*.
Cambridge University Press.
Coupland, J., Coupland, N., & Robinson, J. D. (1992) "How are you?": Negotiating phatic
communication. *Language in Society* 21, 207-230.
Jakobson, R. (1960) Linguistics and poetics. In T. Sebeok (ed.), *Style in language*.
Cambridge: MIT press. 350-377.
Laver, J. (1975) Communicative functions of phatic communication. In A. Kednon, R. M.
Harris, & M. R. Key (eds.), *The organization of behavior in face-to-face
interaction*. The Hague: Mouton. 215-38.
----- (1981) Linguistic routines and politeness in greeting and parting. In F.
Coulmas (ed.), *Conversational routine*. The Hague: Mouton. 289-304.
Leech, G. (1974) *Semantics*. Harmondsworth: Penguin.

宇佐美まゆみ (1999) 「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」『国文学』44(6)、
学燈社: 83-89.

Malinowski, B. (1923) The problem of meaning in primitive languages. Supplement to
C. K. Ogden & I. A. Richards, *The meaning of meaning*. London: Routledge and
Kegan Paul. 146-152.

Turner, G. (1973) *Stylistics*. Harmondsworth: Penguin.

Wolfson, N. (1981) Invitations, compliments, and the competence of the native
speaker. *International Journal of Psycholinguistics* 8:7-22.

うさみ まゆみ 東京外国語大学外国語学部助教授
言語社会心理学、談話研究、日本語教育学